

# オセアニア船旅 2018②

## 【オーストラリア編】



2018年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

オセアニアの船旅を2018年1月8日～3月4日の56日間で行ってきた。その旅行記として既に東南アジア編を発表してきたが、ここにオーストラリア編としてオーストラリアの5寄港地をまとめた。

### 第一章 パース

#### ■初めてのオーストラリア大陸

1月24日快晴、最高気温28℃、最低気温の19℃という絶好の上陸日和になる。そしてオーストラリア大陸初上陸の地はフリーマントルだ。フリーマントルはオーストラリア連邦で一番大きい西オーストラリア州の州都パースの外港として栄えた小さな港町だ。

南緯は31度ということで北半球に例えると北緯31度というと鹿児島あたりの緯度に相当する。

この街も先日聞いたパースのように素晴らしい街なのだと思いますながら、ワクワクしながら初めての大陸に足を着けた。

小さな街なので港ターミナルから中心街までは歩いて行ける。歩くことで街並みをじっくり見ることができる。

そして期待通り、いや期待以上に街はきれいだ。もちろんゴミ一つ落ちていない。近代ヨーロッパ風の建物が続き、歩道も広い。電信柱もなく、過度な広告看板もないので落ち着いた雰囲気がある。まるで北欧の街のような感じだが、ここはやはり南国だ。太陽が燦燦と降り注ぎ、街路樹にはフェニックスも見受けられる。街行く人達は短パンにTシャツ姿だ。街に適度に流れる風も気持ち良い。

気候と街路樹、自然についてはハワイのようだ。そう、ここは北欧とハワイの良いところを併せ持ったところかも知れない。

## ■感動のペイント

街の中心にあるタウンホールという建物には高い塔があり、その塔の上の方に黄色いペンキのようなものが横に 1m 幅くらいで塗られている。この塗装は一体何なのか。いたずらなのか塗装を途中で中断したのか何でこんなことになっているのかさっぱりわからない。



タウンホールから西に 500m くらいハイストリートという商店街になっており、喫茶店やレストラン、スーパー、洋服屋、スポーツ用品店など色んな商店が連なっており地元の人や観光客でにぎわっている。これらの店の壁にも黄色いペンキが塗られている。それは同じ黄色でも同じデザインではなく、水平や斜めになったりもしている。

ハイストリートのどん詰まりにはラウンドハウスという観光名所がある。やや高台で石段を 30 段くらい登るとその門にたどり着く。そしてラウンドハウスの門から、今まで歩いてきたハイストリートを振り返るととんでもない光景が目飛び込んでくる。

何とストリート全体がアートになっている。黄色い輪のようなものが幾重にも先ほどのタウンホールの高い塔まで続いている。

聞くとクジラの骨を模したという。確かにそう言われればそんな感じもする。

街をあげてのアートというか、遊び心というか、こんなものは見たことがない。感動を言い表せないくらいの衝撃を受ける。

素晴らしい。フリーマントルの人々の心意気、おもてなしの心のようなものを感じる。



#### ■芝生が凄い

街を散策していると、観客席をたくさん周りに持った野球場みたいなスタジアムを見つける。中央にあるグラウンドは芝生がまぶしいほどきれいに整備されている。バックネットはないので野球場ではないが一体何だろうと中に入ってみると、ポールが見える。ここはラグビー用のグラウンドだ。そう、ここオーストラリアはラグビー大国だ。さすがにすごい。日本ではラグビー専用のグラウンドは見たことがない。

再び散策中にテニスコートがざっと 20 面くらいあるテニスクラブに出くわす。これらのコート全てが天然の芝コートだから驚く。それも手入れが非常に行き届いている。さすがテニスの4大会の一つ全豪オープンの国だ。

そしてその隣にはフリーマントルパークという緑の芝生いっぱいの広い公園がある。地元の人が数人、犬の散歩やサッカーボールで遊んでいる。広さかというと野球のグラウンドがゆうに2面は取れそうなくらい広い。すべて芝で覆われていて手入れも良い。日本の上等なゴルフ場のフェアウェイくらいの整備状況に感動する。ふかふかの絨毯のような芝生を私たちだけで歩くのはあまりに贅沢過ぎる。

この街は街路樹の緑だけでなくちょっとした公園や交差点の空き地も芝生の緑で溢れている。そしてどこも驚くほどに整備されている。



港近くで船の歓迎イベントが催されているので立ち寄る。その理由はというとカンガルーバーガーだ。事前に船内の説明会でこのイベントのことを聞いており、その中でカンガルーの肉を使ったハンバーガーを紹介していた。

見た目は普通のハンバーガー、味はまずまず美味しい。ミンチにしてハンバーグにしたので硬いとか臭いとかが分からないのかも知れないが、牛肉のハンバーガーと比べてそんな色はない。いやそれよりも美味しいかもしれない。

価格は 8 オーストラリアドル (A\$)、本日のレートで換算すると日本円で約 700 円になる。

#### ■ パースへ

1月25日フリーマントル寄港2日目、今日も晴天だ。そして今日は電車に乗ってパースを目指す。

パースは西オーストラリア州の州都、都市圏人口は 200 万人ということでオーストラリア 4 番目だ。都市圏人口なので周辺も入れての人口のことなので単純に比較はできないが、日本の 200 万人都市はというと名古屋や札幌になる。

パースの最大の特徴は世界で一番孤立した都市ということで 2000km 以内には他に都市がないという。2000km という日本では稚内から鹿児島までの直線距離ほどで、なんと広大な場所なのだろう。

そんなパースを目指して電車に乗ること 30 分、欧米人が世界で住みたい街に到着する。駅もきれいで、そのうえでシンプルなところが素晴らしい。

街並みはフリーマントルと同様でとても美しい。北欧とハワイの良さを併せ持つという特徴も同様だが、パースは大都市だ。たくさんの人々が行き交い、高層ビルの谷間に吸いこまれてはまた出てくる。活気があるが秩序もあるという大人の街だ。東京でいうと新宿と丸の内を合わせたような街といったところだろう。



この街は北欧と同じで自転車が市民権を得ている。車道と歩道に間に自転車専用レーンが設けられている。そして歩道の端で面白いものを見つける。それは高さ 2m 程くらいの四角い円柱状なので、上の方に数字が並んでいて最初は温度計かと思った程、何気なく立っている。



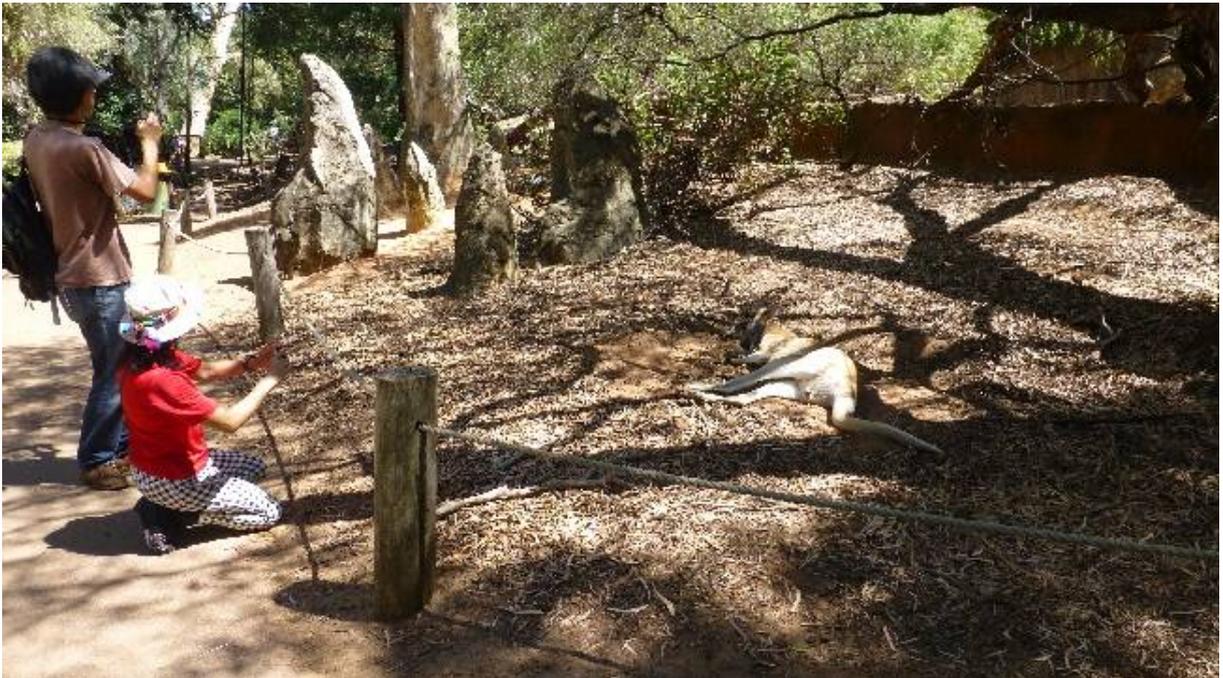
何だろうかと言われ、皆でその装置を見ていると、地元の人らしい一人の初老の男性が自転車でそのレーンを走ってきて手前で止まって何か話しかけてくる。話しながら自転車を前後に動かし始めると数字が1つ、2つと増えていく。この装置は自転車がこの地点を通過した台数をカウントして数字で表示するものだ。本日の自転車通過台数、そして今年の累計台数などがデジタル表示されている。

我々が理解したことが分かると彼は笑顔で手を振りながら、良い旅をと言って自転車でさっそうと立ち去って行った。

オーストラリアと言えばカンガルー、コアラ、タスマニアデビルなどの動物たちを思い浮かべるのは私だけではないだろう。動物園に行けばオーストラリア大陸のみに生息する固有種に会える。やはり動物園は欠かせないので動物園に行くことを事前に決めていた。

一通りの動物たちと初対面をして、オーストラリア大陸に来たという実感がわいてくる。

コアラはもちろん寝ていた。タスマニアデビルも寝ていた。それでもカンガルーは飛び跳ねているものだと思っていたが、何匹かのカンガルーに会ったがみんな退屈そうに寝ていたのが印象的だった。



パースはスワン川の河口から約20km内陸に入ったところにある都市で、スワン川の河口には船が停泊しているフリーマントルがある。

パース動物園はスワン川の対岸にあるのでフェリーで往復するのだが、そこから見るパースの街並みは心ひかれる景色になっている。

そしてスワン川は広く大きいので、まるで湖のほとりに街があるように見える。高層ビルが建ち並び、そのビル群が湖のような川に映る姿は圧巻だ。この川がこの街の景観に大きな影響を与えている。



#### ■キングスパークは絶景

キングスパークという公園が街を臨む山の上にある。街の中心から車で5分くらいの場所だが、山といってもそんなに高くないので私たちは歩いて登ることにした。登る途中は住宅街の中の道を登っていく。どの家もきれいで高級感がある。山の手を広がる高級住宅街というところだろう。道も広く、歩道には街路種が青々と茂っている。

そしていつの間にか公園の中に入っていることに気が付く。背の高いユーカリの並木道が500mくらい続いている。強い太陽の光からユーカリの葉がところどころ漏れてくる木漏れ日に風が抜けていくのが気持ちいい。



ユーカリの並木を抜けると広々とした緑の芝生の広場に出る。本当に広い広場で、広場の至る所に樹々が生い茂り、その中にレストハウスやインフォメーションセンター、戦争記念碑、植物園などが点在するというスケール感はすごい。そしてフリーマントルのように芝生の手入れは行き届いており、ふわふわの絨毯のような場所や刈り込んだゴルフ場のグリーンのような場所もある。もちろんゴミ一つ落ちていない。人々は思い思いのスタイルでこの公園を楽しんでいる。



この公園のもう一つの特徴は山の上にあるので、スワン川のほとりにたたずむパースの街を一望できることだ。パースの中心街は高層ビル群があるがその周りは緑に囲まれている。それらと青いスワン川のコントラストが素晴らしい。私はこの絶景を見て、凄い凄いと言いながら写真を撮りまくっている自分に気が付く。とても興奮している。





帰りははしゃぎ過ぎで疲れて歩く気が起こらず、タクシーを拾おうかとインフォメーションで聞いてみると中心街までは無料バスが出ているという。パース市内には無料バスがいくつも走っているので便利だと聞いていたが、こんなところで恩恵にあずかるとは思っていなかった。

どこまでも素晴らしい街なのだ。

ところが急いで船に帰ってはみたものの、出航予定時間の 17 時になったのに船はいつこうに出航しない。

船内放送では 19 時頃になるという案内があった。港湾当局からの指示とのことで出航許可が出ないらしい。結果は 22 時頃出航ということということで 5 時間も遅れた出航になる。

#### ■初めての講演

1 月 26 日は自主企画「旅のススメ」という講演を行う。ありがたいことに 30 人程の人が聞きに来てくれる。

今回は「日本一周」をテーマに選ぶ。やはりこの船の中では海外旅行をテーマに取り上げるのは勇気がある。乗客の多くは私よりも海外旅行経験が豊富だからだ。従って私の旅の原点である日本一周旅行から入ることにした。

日本一周がどうして面白いかから始まり、私が行った日本一周旅行を紹介する。まず大学 2 年の時に友人たちとワンボックスカーで 50 日かけて回ったこと。次は子育て時期に 4 年に分割し夏休みを利用して家族でオートキャンプを中心に回ったこと。その次は会社同僚と新幹線を駆使して怒涛の 3 日間鉄道旅をしたこと。

それらを紹介した後に現在計画中のフルムーン切符を使用して夫婦での 12 日間鉄道旅のプランを紹介した。

初日には、まずまずの講演になったと思う。



3 時のティータイムで大阪弁のちょっと派手な化粧のおばさんから声を掛けられる。先ほどの講演の話の分からない部分を聞いて来たのだが、話をしているうちにこのおばさんが物凄い人だと感じ始める。

この大阪弁のおばさんは 3 年くらい前からこの船に連続して乗っているというとんでもない人だ。世界一周の時にも寄港地で一度も降りないという船上生活者みたいな人がいたが、このおばさんは全く違う。寄港地ではアクティブに一人旅を楽しんでいる。それは昔仕事でフィンランドに住んでおり、その後はフィンランド語以外の外国語が必要になり必死で勉強したという。今ではフィンランド語、英語、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語、フランス語、韓国語など話せるという。

船旅はクイーンエリザベスに乗ってからはまっているという。

このおばさんとは 1 時間程話したが、旅や語学にまつわる話の他にも講師の講演の内容や介護の話など幅広くそして鋭い。

人は見かけによらないということと、講演の内容については気を引き締めないといけないと心することとなる。

夕食は N さんの誕生日会に呼ばれており、一応は正装にしようかと思ってスーツを着ようか悩んでいたが、やはり自分が主役ではないのでかしまらずに浴衣を着て出席する。

N さんの 84 回目の洋上誕生日会は彼の人徳もあって大いに盛り上がった。結局 3 次会まで行ってしまう。やはり終電のない強みだろう。

#### ■ 出航遅れの理由

船内では航路説明会という次寄港地の案内や船内生活の注意事項を伝える説明会が定期的に行われる。

その中で乗客からフリーマントルの出航時間が遅れた理由を聞かせてくれと質問があった。船側は当局の指示と船の作業とのためだという微妙な説明をしていた。

私が事情通の友人から聞いた話とはちょっと違う。彼の話では停泊中に救命ボートを降ろす訓練をしたが、一艘のボートが再度収納できなくて四苦八苦していたので遅れたという事らしい。友人からは救命ボートを降ろす写真を見せてもらった。

確かに港湾当局からは出て行けとは言われることがあっても、出て行くなどとは言われないのが普通だろう。恐らくそんな設備では航海が危険だから、直してから出航しろという注意だったのだろう。それにしてもあまり隠し事は感心しない、見ている人もいるのだからもう少し事実を伝えた方が乗客は安心するだろう。

## ■たそがれの空、茜色に輝く

南緯 35 度付近で、オーストラリアの南の海域を航行中。天気は雨、気温水温ともに 20℃ということでやや寒い。

ここ 2~3 日は旅の講演の発表資料づくりに明け暮れている。1 時間の講演にはパワーポイントのスライドは 60 枚というのが相場で、講演時間を少し減らしたが 40 枚くらいは作らないといけない。

67 才の大阪のシンガーソングライターのお婆さんの自主企画に行く。彼女も芸達者祭に出たメンバーで昔フォークソングをやっていたが、2 年前から活動を再開したという。お寺の信者で作るお寺バンドでギターとボーカルをやっていて、自作の歌を作った。

その歌がこの乗客の世代感に合っているので船の中で披露しようと思いついたという。

歌の題名は「たそがれの空、茜色に輝く」。なかなか 60 才代前後の人々に共鳴されるような詩で、いかにも昔のフォークソングという素人っぽいところも面白い。

詩の一番のみ、書き留めておこう。

随分遠くまで歩いてきたよ

ルンルンステップで来た道ばかりじゃない

けわしい道の途中で、つまずき転んだ日

深い森の中　さまようような日々もあった

今、人生の坂道をゆっくり下りながら

眺める景色は　悪くないね

たそがれの空は　茜色にかがやく

## 第二章 アデレード、メルボルン

### ■アデレード上陸

1月29日アデレードに寄港する本日は最高気温29℃最低気温19℃、曇り降水確率は60%という天気予報になっている。昨日までアデレードは35℃の猛暑が続いていたというが、適温になり風は強いが心地よく過ごせるのがありがたい。

私たち夫婦は今日も旅行会社のオプションツアーには乗らずに自由行動をすることにしており、大遠征団を組織する。メンバーは居酒屋仲間の連中だ。英語のできる30代Eさん、面倒見が良く旅行好きなHさん、福岡のおばさん二人はTさんとKさんとどちらも酒好き社交ダンス好きだ。そして群馬の博学なMさんだ。

そこに今回あの料理研究中のKさん夫婦も同行することになり総勢9名の大遠征団になっている。

アデレード市街地までは電車で1時間かかる。

船が接岸した港の前には小さな駅舎がありアクセスには便利だがここは無人駅だ。切符はこの港の駅では売っておらず電車の中の券売機で買うことになるが、電車に乗ると券売機の前には多くの日本人が群がっている。群がっている人たちはいっこうに人数が減らない。なかなか切符が買えないようで30分経っても同様な光景が続いている。

中高年ばかりなのと券売機は英語表示のところを持ってきて紙幣が使えず、カードか硬貨のみしか使えないのが原因らしい。地元のオーストラリア人も迷惑そうな顔をしているかと思いきや、親切に日本人に教えているのが微笑ましい。

結局、私はアデレードの駅に着いてから切符を購入することになった。



## ■農地が見えない

電車から見る車窓の景色は平屋の住宅街と緑の芝生の公園が多い。料理研究家のKさんがポツリと言った言葉が印象的で、電車から見る限りここには農園や畑が全くなかった。確かにそういわれればそうだが、この前のパースでもそうだったが農作物の植わっている土地は見たことがない。さすがに目の付けところが料理研究家だと感心する。

農業大国のオーストラリアで畑がないという事はあるにないで、土地があまりに広いので住宅地に隣接する場所に畑を作る必要がなく緑の公園が住宅地には似合っているからだろうか。

アデレードは南オーストラリア州の州都で人口 140 万人というから日本の中核都市、それも政令指定都市レベルだから川崎や京都などのサイズだ。

アデレードの中心部はそんなに広くなく歩いてでも回れそうだが、この街の中心部にも無料バスが運行しているのでそれを有効に使うことにする。

私たち大遠征団は市の北部を回る無料バスに乗り込み、まずは駅の北にあるライト展望台を目指す。バスは緑いっぱい公園を抜けて住宅街を走り始めるがあまりに広い公園なので抜けるまで 10 分くらいはかかる。そして今度は住宅街に入るが住宅は平屋でどの家も広くて大きい。所どころ教会や記念碑、小さな公園を見ることができ、その裕福さを際立たせているのが印象的だ。

そしてここでも農作物を作っている畑は見当たらない。その代りではないがゴルフ場が街の中にある。こんな街の中心地に近いところにゴルフ場とは驚きの言葉も出ない。



バスを降りてライト展望台、セントピーターズ大聖堂を見て回り、再び市の中心に歩いて戻ってくる。街は緑あふれ広くてきれいだ。夢中で歩いていたので時計の針は既に 1 時 30 分を過ぎている。私たちは大きなマーケットにあるフードコートで昼食をとることにする。

私たち 300g のラムステーキを注文する。ライスとサラダがついているので夫婦でシェアして食べる。価格は 13A\$, 日本円で 1150 円程だ。オーストラリアでステーキを食べるならラムかオージービーフだろうと思っていたが、その味は決して期待を裏切らなかつた。



#### ■ オーストラリアはワイン産地

その後はセントラルマーケットまで歩き、バーでビールを飲みながら次に何処に行こうかと思案していると隣のテーブルにはあのセブ島と一緒にタクシーに乗ったFさん一行がいたので彼にどこに行ってきたかと聞いてみるとワイン博物館に行ってきたと言う。私はワインがオーストラリアの主要生産品だということを忘れていた。そこではオーストラリア産ワインの試飲もできると聞けばもう行くに決まっている。

早速私たちはワイン博物館を目指しトラムとバスを乗り継いで行くことにする。トラムは日本でいうところの路面電車だが、古ぼけた印象はなく近代的できれいだ。ただ車体はいろいろな企業の宣伝に使われていてカラフルで面白い。



ワイン博物館に到着、一応博物館なので一通り見学をした後に試飲コーナーに立ち寄る。そこには船のスタッフ、英会話の先生たちが既に陣取って飲んでいる。注文の方法やどのワインが美味しいかなどを教えてもらう。試飲コーナーは天井や壁いっぱいワインの空き瓶が詰まっていて、そのアイデアが面白い。

ここは国立の博物館でワインの生産工場ではない。従ってワインの生産や熟成の姿を見ることはできないが、その代わりにオーストラリアで作られているほとんどのワインの試飲ができる。入場料は無料だが試飲は有料で比較的高いので酔っぱらうほど多くは飲めない。

そう本来の試飲とはテイastingで味見だ、決して酔っぱらうことが目的ではないと自分に言い聞かせる。そうは言ってもこれは美味しい、これは失敗だなどと口走りながら結局は結構な量を飲むことになり予想どおりの結末になる。それでも 18A\$ (約 1600 円) で済む。



帰りには 16 ヘクタールもある広大なアデレード植物園の中を通り抜けて駅に戻るが、この植物園も無料ながら大変良く整備されている。日本の植物園との違いは広さだけではなく、その見せ方にあるようだ。見せるというよりも色んな植物がたくさんある公園を散歩しているという感覚になる。

そういえばパース動物園も動物のいる公園に人間が入って行くという感じで動物との距離が近かったことを思い出した。

## ■2度目の講演

船上で2度目の旅の講演を開く。今回のテーマは「歩き旅」で私が付けたサブタイトルは「レール&ウォーキング」としている。

私はアルチュウ、とはいってもアルコール中毒ではなく「歩き中毒」のことだ。友人と電車やバスで目的地まで行って、20km~40km のロングウォーキングをしてその後に日帰り温泉に浸かり、帰りの電車で打ち上げをするというパターンにはまっている。ん、やはりアルチュウか。

今回の聴衆は 50 人程で、前回よりも増えていることは確かだ。

夜、居酒屋でおばさん二人に声を掛けられ一緒に飲むことになる。先ほどの歩き旅の講演を聞いたというので旅の話で盛り上がる。

隣のテーブルでは宴会が開かれている。その宴会がお開きになった後でまだ二人残って話をしている。見ると和服を着た上品そうなおばさんと、一緒に寄港地を歩く 30 代の E さんだ。早速そのテーブルにジョインさせてもらおう。

#### ■還暦はまだまだ若輩者

上品そうなおばさんも昔から旅をしているというキャリアの持ち主で、この船にはスタッフとしても乗船したという。世界に向けた見識があり、人生を生き生きと楽しんでいることが伝わってくる。

最後に年齢を聞くとなんと 80 才というから驚く。E さんも私も 60 代後半かと思いきや 80 才とはあまりにギャップを感じた。私も E さんも思わず握手をして写真を一緒に写してもらおう。

この船に乗っていると、昨年還暦を迎えた自分などはまだまだ若輩者だということを思い知る。

そもそも還暦とは、その字のごとく「暦がもとに還る」ことで干支に由来している。干支といっても十二支ではなく、「申・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」という十干（じっかん）が組み合わされたものがもとで、十干の組み合わせが 60 通りあるので 60 年で一巡することから暦が還り、還暦という。

60 年で一つの人生を生ききり、次の人生を生きる門出が還暦の意味していることだそうだ。私はこの「生ききる」という言葉にとっても心惹かれる。力限りで成し遂げたような印象がある。

30 周年を半還暦、120 周年を大還暦ともいう。30 才の半還暦は人生の暦の折り返し点であり、30 才前後のいわゆるアラサーの若者はこの折り返し点を意識することはとても面白いかもしれない。

そして今回の旅で 80 才や 90 才でしっかり生ききっている諸先輩を見ていると、これからの私の人生は大還暦とは言わないが、あと半還暦の 30 年くらいを生ききる設計をしないといけないと強く感じる。

#### ■メルボルンを歩く

1 月 31 日メルボルン上陸の日、天気予報は最高気温 18℃、最低気温 12℃、曇りとなっており真夏なのに寒い。ただ地元の人に聞くとアデレードと一緒に一昨日は 35℃もあったというから驚きだ。

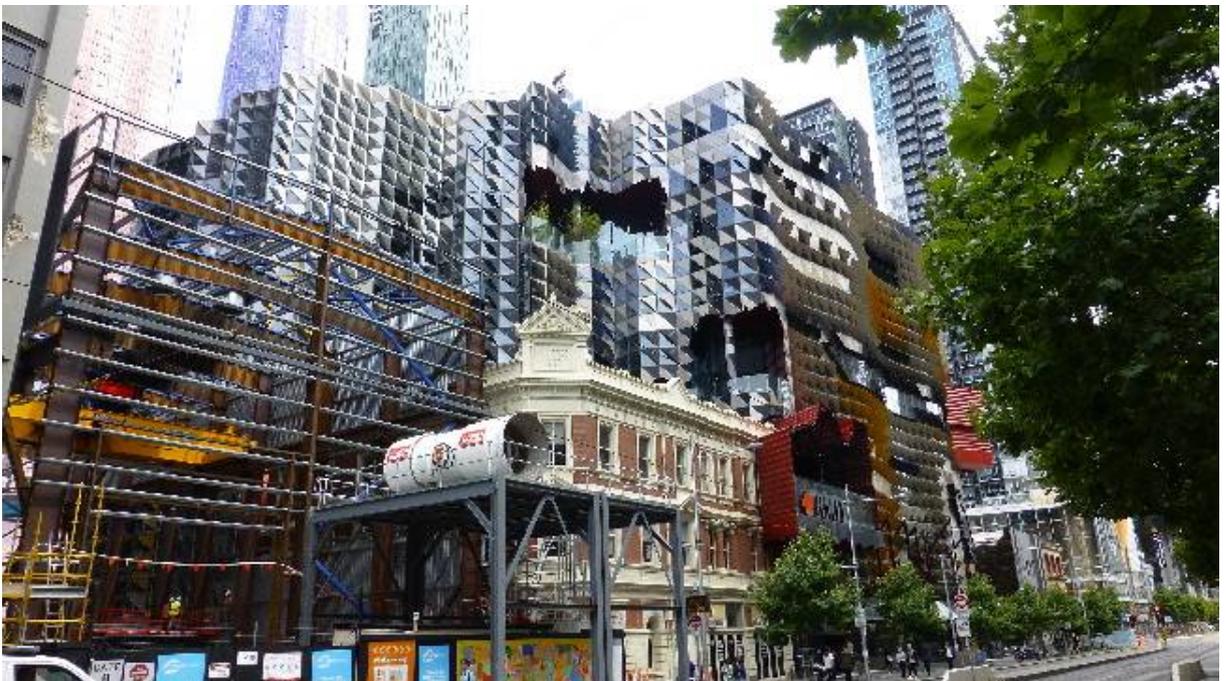
私たちはいつものように居酒屋仲間の大遠征団でのメルボルン観光に出かける。

港近くの駅からトラムに乗り、20 分くらいで街の中心に着く。街は今までのオーストラリアの寄港地同様に広く、美しく、そして緑豊かだ。

メルボルンは歴史もあるので大聖堂や歴史建造物が街の至るところで見られる。高層ビルが建ち並んで、広い緑の公園もたくさんある。それら 3 つのコンビネーションが抜群で、それは過去と現代、そして自然が美しく調和している。



そして特徴的な部分を探すとすればビル全体の装飾だろう。それも高層ビルの外壁が様々にデザインされている。色を塗ったというような小手先のものではなく設計の段階からどのようにしたら映えるか考えられているようだ。多くのビルが競い合うかのように、どうしたらユニークなデザインで目立たせるか、それもただ目立たれば良いというのではなくある種的美徳も感じられる。それらのビル群は現代というよりも近未来と言った方がふさわしい。



トレジャー公園を抜けて、高さ 105m の塔を持つセントパトリック大聖堂に入る。教会の中は静まりかえっており薄暗いながらも厳粛な空気張りつめている。天井までは 50m くらいあり、その厳粛な空気感がさらに増して感じる。正面には十字架、その反対側にはステンドグラスという一般的な造りをしている。そして入場料や拝観料の類はかからない。

通りすがりの喫茶店で昼食をとることになる。私はビーフロール、妻はタスマニアサーモンのバーガーを注文する。夫婦の場合は別々のものを頼んでシェアして食べるという事ができるので便利だ。

妻の頼んだサーモンは少しスモーキーな味で野菜とパンと一緒に食べられる。そして実に美味しい。日本ではサーモンのバーガーは見たことがないが、こんなに美味しいのかと感心してしまう。



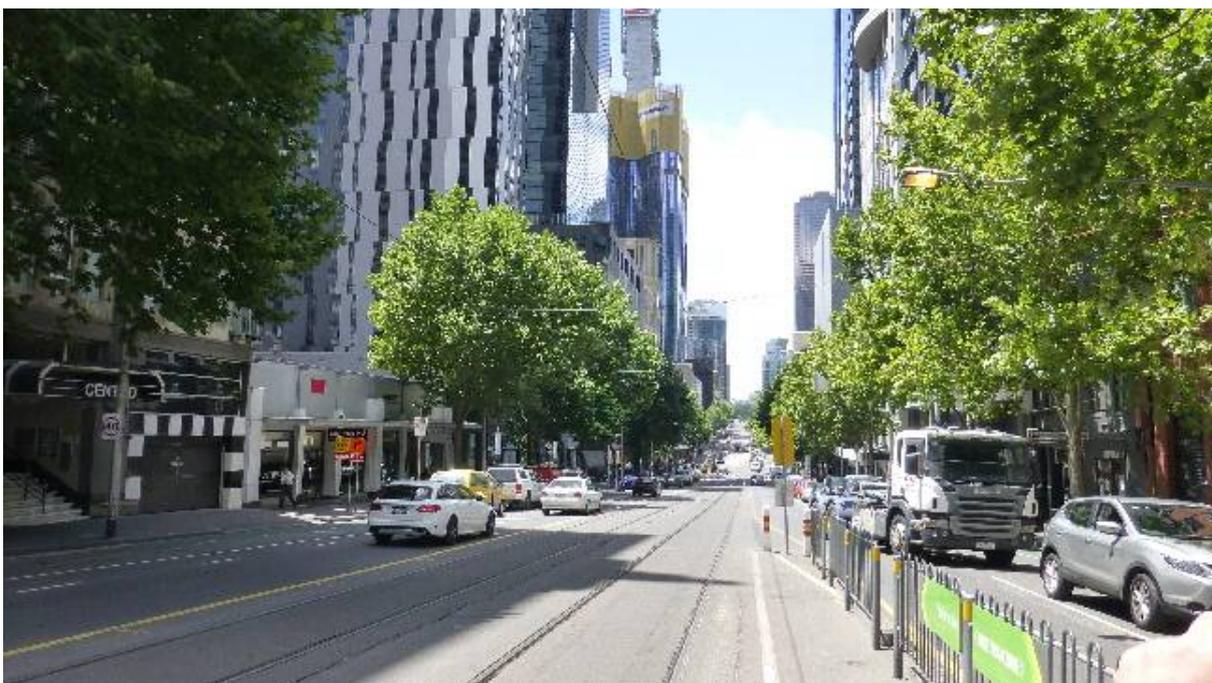
街を歩いていたら偶然にパブリックバス（公衆浴場）を見つける。何と立派な建物の銭湯なのだろうか。入りたいのは山々だったが、外観写真だけは何とか納まる。



世界遺産の王立展示館に行くが残念ながらプライベートでの入場は許可されなかった。その代わりに隣接する南半球最大のメルボルン博物館に立ち寄る。ここはゆっくり見ようとするとも1日くらいかかりそうだが、1時間で見えて回ることとなり駆け足での見学だ。実に多角的なテーマの博物館で恐竜の骨や地球の歴史や人類の歴史などの他に人間の感情や思考を研究するコーナーが印象的だった。(写真は王立展示館)



街を歩いていると、あるいはトラムに乗っていると、このメルボルンという街は「坂の街」という印象が残る。あまりきつくないその適度な傾斜の坂道によって街の景観に奥行きを持たせてくれるから興味深い。



街の中心部にはチャイナタウンがある。中国語の看板がたくさんある活気ある通りで旅行社や両替商、食堂など多くの中国人が実際に暮らしていることを実感する。ここオーストラリアでも中国パワーに圧倒されている。

街の中心部のセントポールズ大聖堂の前を通り、フリンダーズストリート駅に立ち寄る。この駅はアニメ映画「魔女の宅急便」のモデルになったといっているので日本人観光客が多い。



驚いたのは駅の入口近い通路で一人オルガンを弾いている人がいる。よく見かけるストリートミュージシャンとは少し違う感じがする。人々が忙しく行き交う雑踏の中で、なぜかオルガンの音色が一瞬の安らぎを与えてくれる。



メルボルンは素晴らしい街だった。今までのところオーストラリアのどの街も私の期待を決して裏切っていないのが嬉しい。

出航時に船から街の写真を撮る。美しい街だ。

#### ■コードブルー

朝食を食べていたら船内放送が流れる。今日の午前 3 時に緊急搬送のためにメルボルンに一旦引き返したが、現在は順調に次の寄港地に向かって航行中という内容だ。

一緒に食べていた友人の話では昨夜遅くコードブルー、コードブルーという声が聞こえたという。コードブルーとは緊急な患者が発生したことを意味する専門用語で、医療現場を扱った同名のドラマもある。

そしてコードブルーが聞こえた、その時に船がものすごく傾き急旋回したのが分かったという。

つまり病人かケガ人が発生したので、翌日にはなったが船内放送で説明した。前回の地球一周クルーズの時には何も情報を出さずにいたのでその秘密主義に苦情が出て、私もブログや旅行記で触れていた。

これは噂話だが、バリ島で強制送還されたのが 6 人という。強制送還とは船長が下船、帰国を命令するもので、これ以上旅を続けるのは健康上無理だと船医が判断し船長が決断したらしい。確かにあの頃は船揺れがひどく、船内ではインフルエンザや風邪が流行っていた。それにしても 6 人は多い。

## 第三章 タスマニア

#### ■タスマニア上陸

2 月 2 日タスマニアのホバート上陸の日、曇り空だが青空も顔を見せていて天気は悪くない。予報では最高気温 19℃、最低気温 11℃となっている。

オーストラリアはどの港でも上陸時に外来種の持ち込みに対して厳しい検疫がある。ここタスマニアは特に厳しく手荷物の中を一つ一つ開けさせてチェックしている。

タスマニアはオーストラリア大陸の南にある島で、南緯と北緯の違いはあるものの北海道と同じような緯度にある。そして島の大きさも北海道の 8 割程度と似ているが、人口は遥かに少なく北海道の 1/10 の約 52 万人、それでも一つの州を構成している。

辺境の地にある島は流刑の地となるのも相場で、犯罪者たちを収監する監獄が多い。そもそもオーストラリアそのものがイギリスの犯罪者が送られてくる場所で、パースやメルボルンでも刑務所跡が多くあったことを思い出す。そしてタスマニアは其中でも特別で、「オーストラリアの囚人史跡群」という名で世界遺産に登録されている刑務所跡 11 カ所のうち 5 カ所がタスマニアに

あるから刑務所の島といっても過言ではない。

しかしこの島の世界遺産と言えば大自然だろう。夏の気温は北海道と同じくらいだが、冬は暖かい。年間を通して雨が多いので多雨林の森に覆われていて森はほとんど世界遺産になっている。

#### ■マウントフィールド国立公園を目指す

この自然豊かなタスマニアを短い帰港時間でどう見て回ろうかと、Eさんと作戦会議を開いた結果、二人の意見は一致した。

ここでは大自然に触れることがまず重要なのでホバートから 75km 離れたマウントフィールド国立公園を目指す。問題は公共交通機関がないのでレンタカーかタクシーになるが、レンタカーはそれなりにリスクがありタクシーは遠いので高額になる。

遠征団はいつものメンバーで今回は 6 人だ。港で客待ちをしているタクシーで 10 人乗りのワゴン車に目をつけ、価格交渉を始める。割り勘にするなら人数が多いほうが良からうと妻が船から降りてきた若い女の子二人連れを誘って連れてきた。

偶然とはいえこの二人も国立公園へ行きたがっていたというので、彼女たちにとっても渡りに船とはこのことだろう。旅にとって出会い、そして運はとても重要なことだ。

遠征団の平均年齢は下がり、タクシーの中では若い女の子のキャッキヤという声が幸せな気分させてくれる。

車窓は街並みからハイウェイに移り、牛や羊のいる牧草地帯を抜けて田舎道に入る頃には大規模な果樹園のようだが何を植えているのか分からないが農園がある。この国に入って初めて農業の生産場所を見ることになる。都市部や住宅地やその近くを農地にする必要がなく、農業をやる土地はいくらでもあるということだ。この国はどれほど広いのだ。

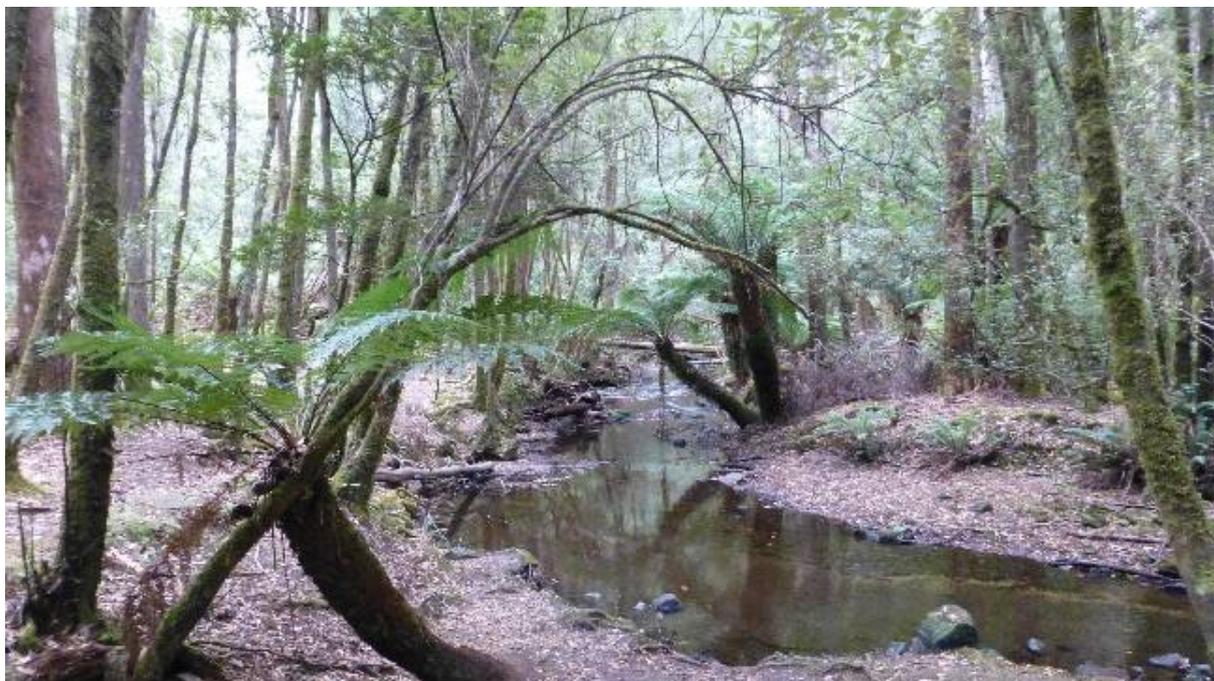
タクシーに乗ること 1 時間半、ビジターセンターに到着する。代金は 180A\$ (約 16000 円)。



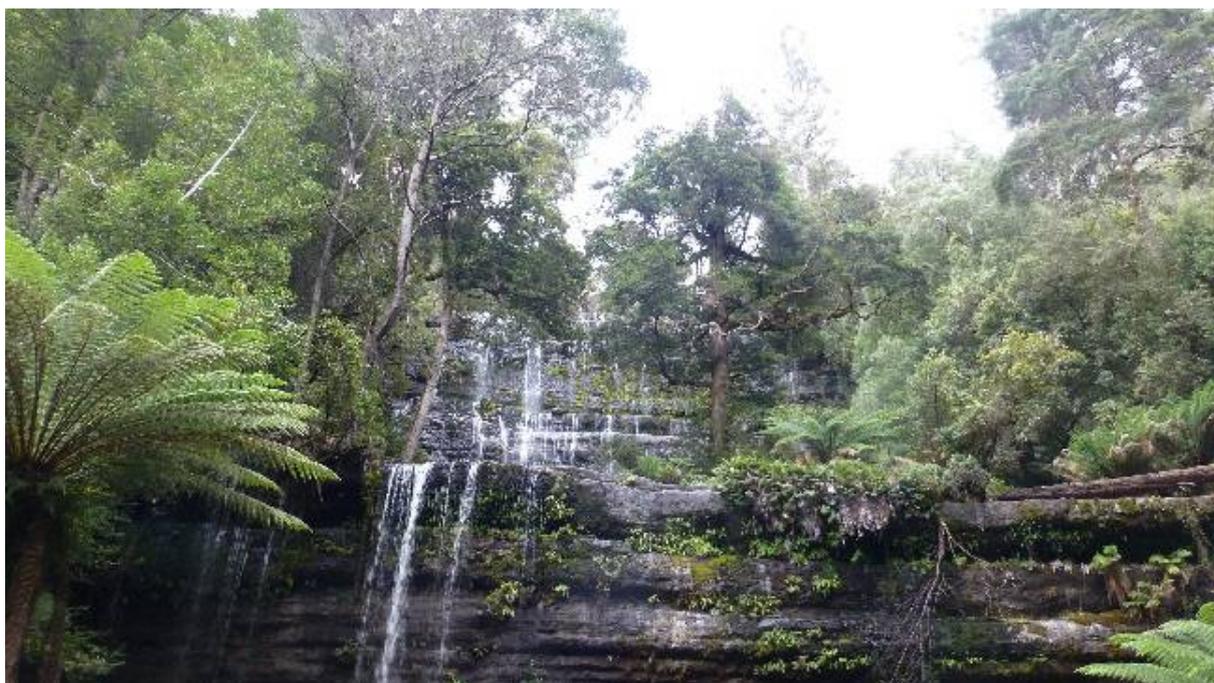
### ■森は三層構造

森の中を散策すると心地よい木漏れ日と優しいそよ風が我々の冒険旅行を後押ししてくれる。

森は大きく三層に分かれており、ユーカリなどの高い木々が一番上の層で森全体を包んでいる。中間の層はシダなどの低い木々だが、日本のシダとは違って木のように幹がある。そして低層は草だが、草以外に苔が非常に多く繁殖している。屋久島の映画「もののけ姫」に出てくる苔に覆われた「苔むす森」に似ている。ここは北海道よりも屋久島に似ているという気がしてくる。



それを裏付けるように水が豊富で川が流れ、滝が落ちている。ラッセル・フォールズという滝にたどり着く。遠征団全員はオオー！と思わず声をあげる。目の前には横幅 30m くらい、高さも 30m くらいの 3 段滝が迎えてくれる。



滝を離れ、再び歩き始めると大きな木が倒れている光景をよく目にするようになる。強風によってなのか原因は分からないが、この島もこの公園は手つかずの自然を残すことを最優先しているので、自然現象で倒れたのは間違えない。そしてそれらの倒木にも苔がたくさん生えており、その年月の経過が感じられる。



トールツリー・ウォークというエリアに入る。森全体がもともと高い木々で覆われているが、いっそう高い木のエリアらしく、説明する看板もある。木々はユーカリの一種ということで70mくらいの高木が10本以上は確認できる。こんなに高くなるには相当の時間がかかっているに違いない。この森は長い年月をかけて新陳代謝を繰り返しながら成長している。





#### ■ローバ（老婆）の休日

大遠征団の 8 人は和気あいあいに、そして付かず離れずの微妙な距離で探索をしている。いつも先頭に立つ E さんはペースが速いので、彼は気を遣って一番ペースの遅いおばさんたちに先頭を譲り、後ろの方に下がってきた。

若い女の子二人たちと近い位置になり、年齢が近いので自然にいろいろな話をし始める。彼はアフリカやアジアでの数年間の仕事経験があり、合間を見ては旅行や将来のスキルアップをしている。スキルアップには各種資格などがあるが、ヘリコプターの免許も持っているというからすごい。ただの 37 才ではない。

そして旅や冒険も好きで 2 月の最も寒い時期にシベリア鉄道に乗ってモスクワまで行ったという。極寒キャンプなどの私の趣味にも共通するものがある。



そんなことを彼女たちと話しているのか盛り上がりを見せている。私や妻やおばさん二人もやはり若い子同士がいいね。おばさんばかりじゃ、やっぱりダメね。と理解あることを言っている。年をとったら自覚が重要だ。

そのおばさん3人も疲れたのか、休憩時は3人でベンチに座っている。その中いる福岡の元気おばさんの一人が自分たちのその光景を称して「ローバ（老婆）の休日」と言っているのが大うけしていた。



3時間程歩いて森の探索が終わり、ビジターセンターに戻る。大遠征団は建物から外に出たところにあるテーブルに陣取ってサンドイッチとビールで乾杯をする。運動の後のご褒美以外に空

気のすがすがしさも手伝ってビールが格別に美味しい。

そして色んな話が昼食に花を添えている中、自然豊かなタスマニアを体験するために 75km 離れた国立公園を選んだことに大そう喜んでいる自分たちがいることに気が付いた。

タクシーを降り時間があつたので市街地を散歩するが、街の綺麗さは他の都市とはあまり変わらない。ここホバートはオーストラリア最南端の都市で港町、日本でいうところの最北端の都市に相当する。だとすれば稚内になるのだが、人々が元気に行き交う姿や街の活気は残念ながら稚内とは全く異なる。



#### ■部屋は水浸し

本日朝一番で旅行会社ジャパングレイスの女性社員がお詫びに私たちの部屋に来た。そして彼女の謝罪の言葉、その低姿勢にいささか私も驚いている。

ことの始まりはこうだ。

昨夜 10 時頃がキャビンの洗面所を使った後に、ジャーという水が飛び散るような大きな音が聞こえた。何の音かと分からないでいると 1 分もしないうちに洗面所ではなく、キャビンの絨毯のところから浸水が始まった。先ほどの音に続いてのことでどこかのパイプでも外れたのだろうと慌ててレセプションに電話した。電話には女性が出て英語の対応になる。私は部屋番号を告げてから Water leak、Emergency と訴えた。

その後 2~3 分はあつたらうかバスタオルなどで応急処置をするも全く効かない。係員が到着して対応し始め 10 分くらいで収まったものの浸水は部屋の 1/3 くらいまで進行してしまった。

昨夜のうちに修理し、ある程度の水を吸出したので生活には特に支障はない。この船では水漏れや水浸しの話をよく聞くので私もあまり驚かなかった。しかしまさか自分が遭遇するとは思わなかったが、乾燥している船内なのでちょうど良いかと乾くのを待っていたところに彼女が現れたという訳だ。



そのジャパングレイスの彼女は被害状況を確認し戻り、その後に電話がかかってきて申し訳ないが部屋を別に用意するので数日はそちらに移ってもらえないかという申し出をしてきた。

私は了承し、今日からしばらくの間は広い窓の有る部屋に移ることになった。

今回のオセアニアクルーズは予算縮小を決めて、窓のない内側の部屋を選び、オプションルツアーも一つも取らないというポリシーで乗って来た。だから内心は喜んでいるのだが、彼女には「しょうがないなあ」という顔をして対応している自分にもう少し正直になれと別の自分が言っているのに気が付く。

## 第四章 シドニー

### ■シドニー入港前日

曇りだが気温はちょうど良いので 24℃くらい、シドニーに向かって非常にゆっくりと航行している。多分時間調整なのだろう。

昨日の午後からプールが解禁になり、何人かのおじさんが泳いでいる。そのプールサイドで私たちはフルーツパーティをしている。居酒屋仲間がタスマニアでフルーツを買い込んできたものだ。

夜、オーストラリアの先住民族アボリジニの 3 人のミュージシャンの演奏会がある。楽器はドラムとベースとギターの 3 つ、それにギター奏者はボーカルも兼ねていて、時おり現地の楽器で大きな笛を吹くという構成だ。

演奏も歌も上手い、そして迫力もある。それだけではなく円熟味の中に余裕みたいなもの感じられる。その余裕が様々な訴えに聞こえる。音楽は楽しむものだ、歴史を伝えるものだとも聞こえてくる。シドニー入港前日は楽しい夜になる。

#### ■シドニー上陸

2月5日シドニーに寄港、本日はブルーマウンテンズという場所に行くことにして、またもや大遠征団が結成されている。いつものメンバーに加えて港ターミナルで偶然会ったAさん夫妻と私たち夫婦で総勢9名に膨れ上がった。

港から駅までフェリーがあるが待っている人も多いため、タクシーを拾おうとしていると現地人から声を掛けられる。それらしい服装をしているので最初は現地の係員かと思ったが白タクのようだ。一人12A\$でどうかと誘ってくるので、OKと答えると大きなワゴン車に案内される。

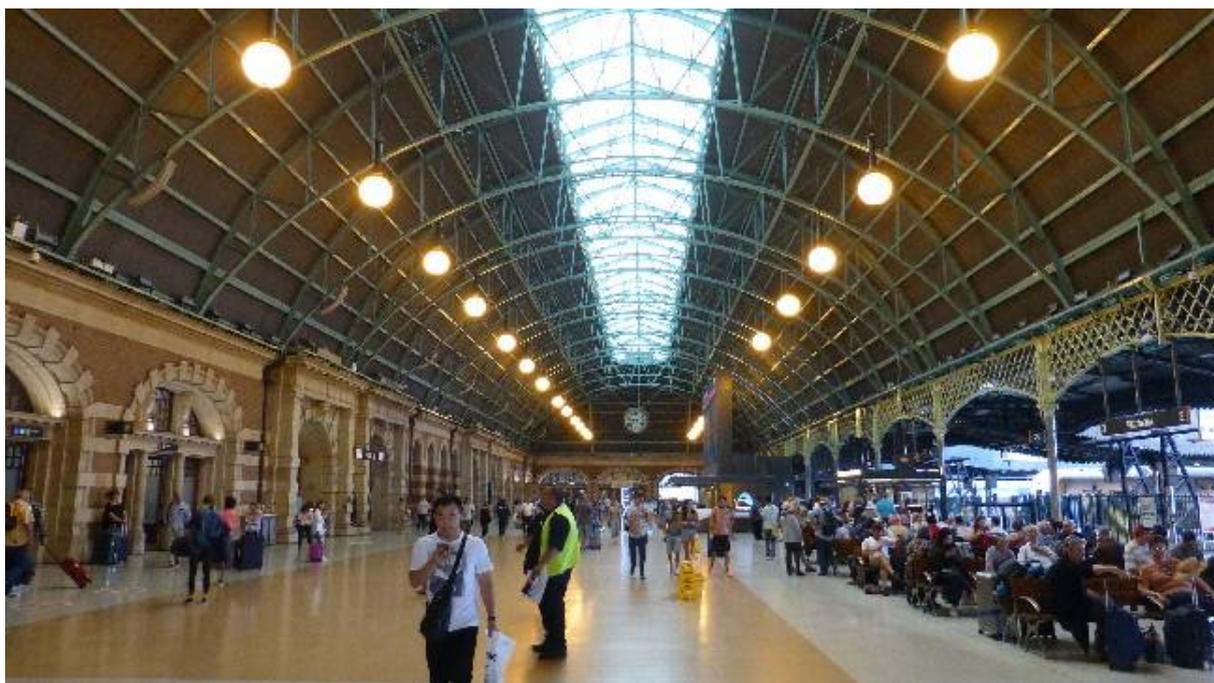
12A\$が高いとは思ったが、早く電車に乗りたく即答してしまった。フェリーで行っても9A\$でもあり、さらに1km程歩かなければならないので時間を金で買ったことにもなる。それでも一人10A\$くらいには値切れた気ができてやや後悔しているから、人間とは欲深いものだ。

#### ■電車の旅

さて駅に着いたが、切符の買い方が分からない。日本でいうところのSuicaのようなチャージできるオパールカードがある。ガイドブックでは15A\$となっていたが、20A\$に変わっている。これ以外にも時刻表が時間が違うなど、ガイドブックはあくまでもガイドラインに過ぎない。

このオパールカードの利用について解釈が分からないところがあって昨夜も居酒屋でEさんとあれこれ話し合ってたが、多分20A\$で1日乗り放題ということで決着した。

さあ、カードを買ったのは良いが、電車は出たばかりで50分待ちとなる。今朝の白タクで時間を金で買ったはずが、これでは意味がない。



電車は予定通り出発し、2時間の電車旅が始まる。私たち夫婦はAさん夫婦と4人のボックス席で和気あいあいと話を始める。旅の話や船内生活の話と尽きない。

1時間程話をしていた頃に、後ろの席のアジア風の男が英語で何か話しかけ来る。なんか怒っているようでよくよく聞いてみると、うるさいから静かにしろという事で、車内ポスターを見ろとポスターを指差している。確かにそんなようなことは書いてあるが、夜間とも書いてあり反論しようかと思ったが、一応謝って小声で口数少なく話すようになる。

日本にいと中国人はうるさくて周りの迷惑を考えない人種だと言われており、私も全く同感だったが、今私たちはその中国人になっているのかと気が付く。

駅に着くと既に12時を回っているので、まずは腹ごしらえだ。駅近くのレストランに入り食事を注文するのだが、私の目に入ったのはカンガルーバーガーだ。オーストラリアの最初の寄港地パースでも食べたが、この店ではメニューのトップにあり、さらにパースの2倍以上の17A\$もするので期待できそう。やはり他の国では食べられない食べ物を選ぶのは常道だろう。

出てきたバーガーはやはり大きい、そしてフライドポテトも付いている。この国の人々は大柄なのは分かるが、2人分くらいはあるから呆れてしまう。

早速かぶりつくとても美味しい。食感も予期していたものと違う。パースで食べたものはひき肉にしてハンバーグにしたものだったが、こちらは肉そのものだ。よく見るとカンガルーの生肉をミディアム・レアで焼いてタレを付け、野菜と一緒にパンに挟んである。その肉は柔らかく臭みもなく、実に美味しい。頼んだ甲斐があったというものだ。



#### ■ブルーマウンテンズ

バスに乗って展望台に着く。展望台といっても日本の小さな展望台とはだいぶ異なり、草野球のグラウンドほどの広さで、先の方が丸くなっている扇方をしている。私たちは扇の要部分からせり出した端の方に歩き、手すりの前まで来ると大きく広がる絶景をみる事が出来た。

手すりの下は急な崖で、その下には大きな谷が広がり谷は樹木に覆われている。そして谷の遥か彼方にテーブル状の山々が連なっている。テーブル状の山々の上の方は岩が見えているが中腹から下は緑に覆われていて谷と一体化している。だから谷といっても盆地のようにも見える。それは SF 映画でよくある超大型の空飛ぶ円盤がすっぽり収まりそうな形をしている。そんな谷と山々が幾重に重なるように遥か彼方まで続いている。だからブルーマウンテンでなくブルーマウンテンズという複数形の名称なのだと改めて思う。



#### ■スリーシスターズ

その谷の左端の岩山の一角が 3 つの大きな岩の柱に分かれており、岩の柱といっても一つ一つは 20 階建ての細いビルのようなものだから大きい。そしてこの 3 つの岩を地元ではスリーシスターズと呼んでいる。確かに言われてみれば 3 姉妹に見えない訳でもない。



言い伝えによれば、この地に3姉妹と祈祷師の父親が住んでおり、ある時に魔物が娘たちを襲いに来たので父親が娘たちを守るために娘たちを岩にし、父親自身もコトドリになって岩穴に逃げ込んだという。しかしコトドリになった父親は二度と人間になることができず、3姉妹もそのまま岩になったままといい。当然現地の言い伝えといえ、先住民族アボリジニの伝説になる。

そのスリーシスターズの一番手前の岩には金属製の橋が架かっており、その橋まで急峻な階段を降りると橋にたどり着く。ビルの高さで10階くらいだろうか、しかしかなり急な階段なので相当にきつい。



スリーシスターズに触るためにその橋を渡るとタスマニアと一緒にタクシーに乗って旅した女の子二人に偶然出会う。そしてこの後のことを聞くと下の谷に降りて色々なアトラクションを体験するという。そうかそんなアトラクションもあるのかと早速参考にさせてもらおうとEさんと示し合わせる。

#### ■シーニックワールド

その谷でのアトラクションの総称をシーニックワールドと呼んでいる。徒歩以外の移動手段が3つあり、崖の上と谷を結ぶのはケーブルカーとロープウェイ、崖の上とそれに対面する崖の上を結ぶロープウェイがある。

私たちはまずケーブルカーで谷に降りることにし、傾斜45度というとんでもないケーブルカーに乗り込む。ガルウイングのドアが閉まり発車の合図とともに音楽が鳴り始める。音楽はインディジョーンズのテーマだからスリル満点で期待させてくれる。

最初は傾斜角20度くらいだったが、発車してしばらくして急に角度が変わり、ジェットコースターで落ちるような感覚で45度に達すると車内は歓声の渦だ。ジェットコースターと異なりシートベルトがないので天井の枠につかまるしかないのが面白い。そもそも椅子の角度も後ろにふんぞり返っている理由が今分かった。



谷に降りると、森林の中に木道が整備されており快適に歩くことが出来る。谷と言っても結構平らな部分もあるのでこの木道で 30 分、60 分という散策コースもあるが、時間が足りない私たちは 10 分程の森林散策の後に登りのロープウェイで崖の上に戻る。

時間が足りないとは、やはり朝の駅での 50 分間の待ち時間が悔やまれる。

そして最後に崖の上から別の崖の上を結ぶロープウェイに乗り込む。このロープウェイはほぼ水平に移動し、谷を真下に見ながら崖から落ちる滝を見ることが出来る。

ロープウェイのゴンドラの真ん中は 30cm くらい高くなっている。私はこの台は展望を良くする踏み台かと思っていたが、ゴンドラが動き始めて間もなくすると台の下が開いて谷を上から視

くことが出来る仕組みになっていることが分かった。もちろん台の上の部分は強化ガラスになっているので落ちることはないが、何となく不安の人はガラスの真ん中には乗っていない。人間の心理とはこういう事かと改めて感心する。



なかなか面白いアトラクションを味わうことが出来た。これで39A\$、日本円で3500円程だが、みんなの顔からは満足の表情がうかがえる。

帰りのバスと電車も合わせて交通費は20A\$で、タクシーや昼食入れても今日のミニ旅行の費用は約1万円になる。実はEさんが今朝船を降りて港のターミナルで財布を忘れたことに気が付いて、今日は私が全て立て替えて払っていたので比較的細かく覚えていた。

日本にしても1万円でこれだけの経験はできないだろう。それもこれも晴れていたからかもしれない。雨が降っていたならばブルーマウンテンズは何も見えなかったかも知れず、お天とう様に感謝だ。

#### ■シドニー2日目は街歩き

昨日同様に晴れ、それも快晴に近いのでかなり暑くなる。

今日は夫婦二人でシドニーの街歩きをすることにし、早速歩いているとベビーカーを押している女の人がいる。ベビーカーに乗っているのは2才の男の子で、同じ船に乗っている親子連れだ。

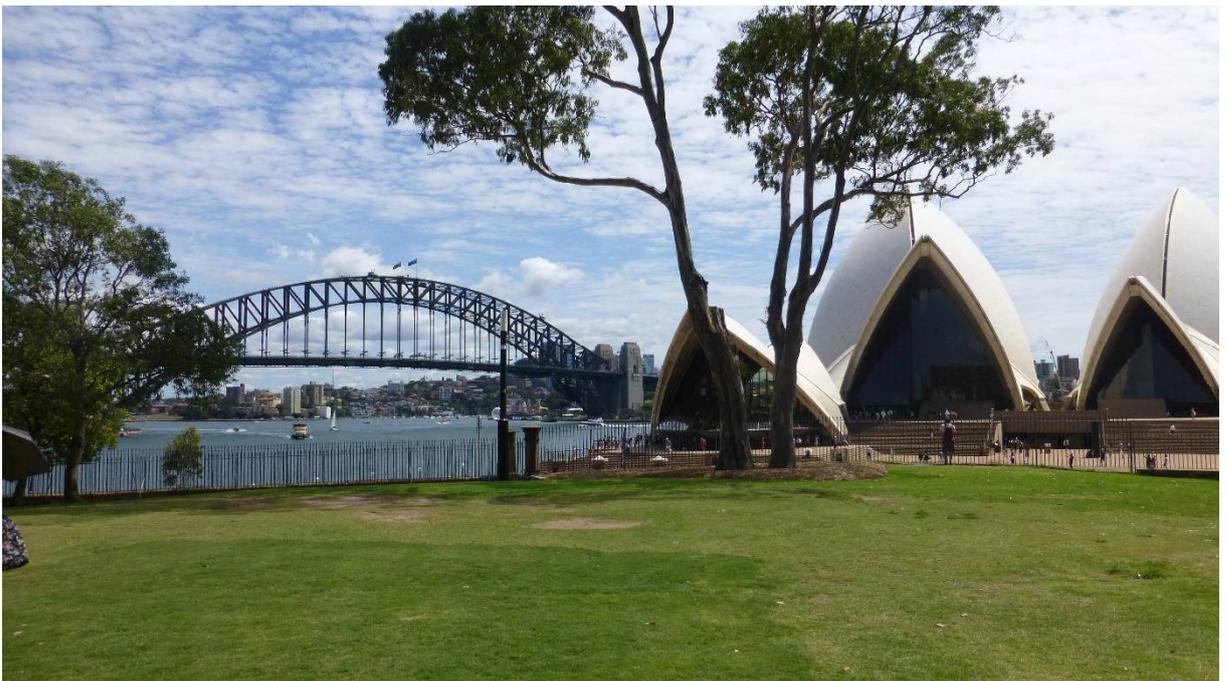
公園にたどり着くが小高い丘の上にある公園なので、頂上まで50段くらいの階段が真っ直ぐに延びている。この階段を登らないといけないかと思いきや、頂上付近にはエレベータの出口のようなものが見えたので、地元人らしい紳士に聞くとエレベータの場所を教えてくれた。きれいで景色が良い公園だけではなく、身障者や乳児への配慮があることもオーストラリアという国の素晴らしいところだ。



この親子の母親に聞けば 56 日間の船旅に親子二人で乗船して、その間は夫が一人で家を守り働いているという。3 年間の育児休暇が今度の 3 月で終わるので 4 月から職場復帰、そして子供は保育園に預けるといふ。その育児休暇の残りを上手に使ってこの船旅に乗ってきたという。こんな親子旅行もあるのかと改めて旅の幅広さに感心してしまう。

この親子にしても船に乗っている別の子供たちにしても、乗客やクルーなど皆からいつも気にかけてもらい可愛がられている。この母親もそれには感謝していると言っている。乗船したことに大満足しているという。

そしてこの母親は 30 才前後、そう半還暦という人生の節目での決断だったのだろう。



私たちは街歩きを続け、ハーバーブリッジ、オペラハウスを見て回る。どちらも海そして青空とのコントラストが抜群で、あたかも自分たちが自然と建築物との融合という大きな舞台に立っているかのような錯覚に陥る。

直ぐ近くには 11.6 万トンの大型客船ダイヤモンドプリンセスも停泊しているから、とても絵画(え)になる。それはこの船に来年の 2 月に私たちが乗る予定になっているので、余計に思い入れが強くなっている気がする。



夜の出航は見事なシドニーの夜景が見送ってくれる。まずは高層ビル群、そしてハーバーブリッジが、最後はオペラハウスの見送りだ。船だからできる演出だろうと思いながらデッキに出て見送りされる気持ちは格別だ。



### ■3度目の講演

シドニーを出てニュージーランドに向かう船の中で、3回目の講演を行う。テーマは「温泉」だ。

初回より2回目少しずつ聴衆が増えて、今日の聴衆は70人くらい集まっており、立見席も出るほどの賑わいになっている。温泉というテーマが良かったのだろう。写真はおろかビデオカメラを回している人も見かける。

講演の内容は、まず温泉の定義や泉質について説明し、実際に自分が行った温泉をいくつかのパターンに分けて3つずつ紹介する。秘湯の宿、泉質がお勧めの湯、ユニークな温泉地、温泉で町興し、絶景の湯、癒しの湯という分類だ。

約40分間の講演はつつがなく終わり、激励や質問攻めにあうがこれも講演者冥利につき実に楽しい。

### ■洋上歌合戦

気温 19℃、海水温 20℃で少しひんやりとしているが、晴れているので太陽があたるデッキに出ると暖かい。タスマニアとニュージーランドの間地点を航行中だ。

洋上歌合戦なるイベントが開催される。18組の乗客がカラオケで歌を競い合うものでNHKの紅白歌合戦風にしようとしたもので、出演者には予選がさせられたという。蓋をあけると町内会のカラオケ大会か、NHKの素人のど自慢のようなものになっているが、会場は盛り上がりを見せている。

居酒屋仲間も出演していたので、そういった人たちに仲間内から多くの声援が飛んでいる。乗客参加型のイベントの良いところだ。

若者が少ない、いやほとんどいない今回のクルーズではスタッフが必死になって裏方や盛り上げ役を務めているのも印象的で2年前のクルーズとは雰囲気がいぶ異なる。

私は2年前にはこういったイベントを少し冷ややかに見ていたが、スタッフの懸命な頑張りとは何よりも乗客が楽しめればよいというように思うようになっている自分の変化に気づく。

### ■水漏れもお詫び

キャビンの水漏れのお詫びとして船のホテルマネージャーからフルーツの盛り合わせが詫状とともに手元に届く。今までいろいろ漏水の話は聞くが、あまり対応の良さをほめる乗客はいなかったのが不思議な気分だ。

あなたたちだけ特別だというように思わせたら船側の対応は上出来だろう。多くの人々は特別扱いに極めて弱いから。